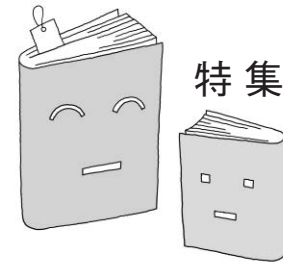


入門期の 国語の指導を考える

—体験と言葉をどう結びつけるか—



〈最初に教える言葉は？〉

赤ちゃんに最初に教える言葉は何か、ということに気づいたのが、通勤電車の中吊広告を見たときである。広告には、紙面一面に大きく「Please」とだけ書いてあったので近づいてよく見ると、下の方に小さく、「アメリカで二番目に教える言葉」とあり、隅の方に、〇〇英会話学院とある。そのとき、それでは一番目は何かと連想した。勿論「サンキュー」である。ならば、三番目は何かと考えていくのが、模倣から創造へのステップである。三番目はとアメリカ帰りの大学教授にきくと、即座に「ユアウェルカム（どういたしまして）」という。

この、「ありがとう、どうぞ、どういたしまして」の三つの言葉は、子どもの躰の基本としても必要である。「三つ子の魂百まで」なのだが、問題は、日本ではそうした教育論がないので、小学生になってから慌てて言語教育、道德教育といっても手遅れなのである。入学前の言語教育は大きな忘れ物である。

〈体験から学ぶ言葉〉

そういえば、若い頃二度目のドイツ留学からの帰国に際し、家族を呼び寄せて、二週間位滞在したときのことである。そのとき、当時三歳の二男が覚えたたったひとつのドイツ語が、「ビッテ」（英語のプリーズ）であるが、それはドイツの人達が日常生活で如何にビッ

人生初期の言語教育 —無意識的学習と意図的学習—

お茶の水女子大学名誉教授

森 隆夫（もり たかお）

〈喃語から言語へ—そのプロセスは？〉

人間（赤ちゃん）が最初に喋る言葉は何だろうか。かねがね疑問に思っていたので、発達心理学の教授らにきいてみたが、いずれも定かでない。大方の答えは「喃語」になるが、それは「アー」とか「ウー」という「言葉にならない段階の『声』」であって、言語とはいえない。喃語から言葉に移る「発達」の過程が知りたいのである。

それを研究する方法は二つあると思う。ひとつは、赤ちゃんが自然に覚えていく（学習する）言葉を調べる方法、いまひとつは、親が積極的に赤ちゃんにはどういう言葉から教えたらいいかを考える方法である。前者は比較的容易だが教育学的には後者の方法が重要である。にもかかわらず、我が国ではそれがほとんど行われていない。つまり、発達教育学（発達心理学ではない）が遅れているとい

テという言葉を使用しているかを表わしている。次男は無意識のうちに「ビッテ」という言葉とその使い方（「ビッテ」にはどういたしましての意もある）を覚えたのである。帰国後も暫くの間、ビッテと言っていたのでビッテというニックネームがついた。

それはさておき、このことは、言語の習得は、無意識のうちに模倣しながら覚えていくことを表わしている。ところが、学校教育では意識的・意図的に模倣させることから始まる。

ここで重要なことは、入学前の無意識的学習の多寡が入学後の意識的学習の效果に影響を及ぼすということである。つまり、入学前の直接体験学習が多ければ多いほど、入学後の学習がスムーズになるといえる。そこで考えられたのが、この「無意識的学習」と「意図的学習」を統合する教育方法で、これをイメージトレーニングという。その際、無意識的学習を意図的学習に先行させることが重要である。勿論、学校教育の一環として無意識的学習を意図的に行うこともできる。実はそれが生活科でもある。また、教師の学校生活での態度、行動が模範的であれば、子どもは教師の模範的行動を無意識的に学習し、さらにその教師から意図的に道德の指導をされると一層道德教育の効果が上ることになる。道德教育にはイメージトレーニングが必要なのだ。



森 隆夫（もり たかお）
1931年富山県生まれ。東京大学教育学部卒。フランクフルト大学留学（フムボルト財団）。国立教育研究所員を経て、現在お茶の水女子大学名誉教授。1977年から1981年まで同大学附属小学校校長を務める。中央教育審議会委員、教育改革国民会議委員等を務める。光村図書の生活科教科書の作成に携わる。著書に著作集『教育の扉』（全15巻 ぎょうせい）、『校長室の知恵』（ぎょうせい）ほか多数。

うことである。したがって人生初期の言語教育の研究が望まれる。

〈模倣と模範〉

あらゆる教育の第一歩は模倣である。それを疑う人は、今、書いたり読んだりしている文字を自分で発明（創造）したものでどうかを考えてみるがよい。それはさておき、「模倣」ときいたら「模範」を連想することであり、どうせ模倣するなら善いこと、美しいこと、「模範を模倣」した方がよい。だが、残念ながら、赤ちゃんは模範か否かの判断力がない上、動けないから身近の親（必ずしも模範といえない）を模倣せざるをえない。ここに教育の悲劇の第一歩がある。「子は親の鏡」といわれる所以である。「親は子の鑑」でなければならぬにである。「嗚呼」（これは大人の喃語か？）

〈全身学習法〉

ところで、入学前の生活体験の中で影響が大きいのは、テレビとゲームであるが、両者とも「影」の部分の多く、「光」は少ない。曇天下にある言語環境にときどき光が射すのは、音楽かもしれない。歌といえば、生涯教育的には子守唄に始まり、童謡、小学校唱歌、フォークソング、演歌……と続くが、これらは全て、人生の子守歌といってよい。メロディがこれに加わり、心も癒されるからだ。

そういえばユダヤに全身学習法といって、声を出して意味が分からなくても読みながら、手でなぞりながら、体を動かしながら全身で覚えさせるという方法があるが、これは記憶力をつけることになるという（ユダヤ人にノーベル賞受賞者が最も多い理由のひとつ。なぜなら、創造とは異質（多様）な知識の組合せだから）。

〈入門期以前こそが大切〉

つまり、言語指導は乳幼児期から考えるべきである。それは単に国語教育というだけでなく、人間教育の基礎でもある。しかしながら、現実にはこの分野の研究は遅れている感がある。国語教育は生涯学習の第一歩なのである。